

「当事者研究の部屋」から見た当事者の記述の分析 —浦河べてるの家を対象に—

和光大学 人間関係学部
人間発達学科 伊藤武彦ゼミ
大高 庸平



内容

- 1. 問題
- 2. 目的
- 3. 方法
- 4. 結果
- 5. 考察
- 6. 参考文献

問題

統合失調症とは、躁うつ病と並ぶ代表的な精神疾患である。2002年の呼称変更以前は、精神分裂病として人々に認識されてきた。

統合失調症の発症率は一国の全体人口の約0.7%から1.0%であり、およそ100人に1人の割合であるとされる。発症率における地域差はなく、全世界的に同程度であり、いわゆる特別な精神疾患ではない。

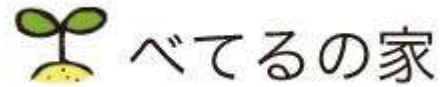
統合失調症の症状は、感情(気分)障害, 思考障害(妄想など), 知覚障害(幻覚など), 認知障害, 意欲・行動障害に分けられる。症状ごとに陽性症状または陰性症状に分かれるが、行動面として感情障害, 意欲・行動障害が表れるとし、社会行動への適応困難が問題とされる。



統合失調症の当事者は、しばしば人々によって差別や偏見を受けてきた。

しかし、近年の精神医療の進歩に伴い、従来の方針であった患者を隔離し、精神病院で保護する方法が見直されている。いわゆる社会的入院によって地域と人々を切り離してしまうような、医者または支援者主体の視点における回復の状況から、病床に縛り付けられてしまった当事者と地域を繋げ、当事者自身の可能性や生きる力を取り戻す作業を支援する当事者主体の回復の試みに変わりつつある。当事者主体としての回復を考えるためには、当事者自身の語り(物語)を回復への起点として考えていく必要がある。回復とは、医学の定義に基づいた症状の緩和だけではない。

当事者の物語の取り戻しはPhilip Barkerによるタイダルモデル(満ち引き理論)に代表されるように、これからの精神医療を発展させる上でかかせない領域となるだろう。では、実際にどのような言葉が「当事者研究の部屋」において記述されているのだろうか、また彼らに共通したキーワードとは何か？



浦河べてるの家とは

浦河べてるの家は北海道浦河町にある社会福祉法人であり地域の重要な活動拠点である。精神科を利用する当事者と地域の有志によって1984年に設立された浦河べてるの家は、生活共同体としての機能だけでなく、日高昆布を柱に地域と密着した事業を展開し、働く場としての共同体として地域の繁栄に貢献している。

浦河べてるの家は早くから精神科病床の削減を行い、病床での治療ではなく入院患者の地域移行を実践してきた。さらに当事者のニーズに応じて、SST(ソーシャルスキルトレーニング)、SA(Schizophrenics Anonymous)、当事者研究、子育て支援ミーティング、ピアサポート、権利擁護サービスの活用などの支援プログラムを積極的に導入している。



当事者研究 —自分自身で、ともに—

浦河べてるの家において最も特徴的なプログラムは当事者研究であろう。当事者研究とは、浦河べてるの家において30年以上にわたり当事者と支援者との実践の積み重ねの中から生まれた心理教育プログラムである。

当事者研究は支援者ではなく、当事者自身が主役となり行われる。当事者自らが抱えるさまざまな苦労や問題と向き合うことにより、(病気・障がいによって)切り離されてしまった自分自身と向き合い、「考える」ことへの回復を目指す。そして、これまでの苦労や問題を自身の言葉によって表現し、語ることによって当事者の人生の物語が垣間見えてくる。当事者の人生そのものに意味が生まれ、総合的な回復のはじまりであるといえる。当事者研究とは、自分自身を取り戻す研究なのである。

さらに、浦河べてるの家では当事者研究をミーティングによって仲間と共有することにより、あるがままの弱さを公開し、生きる力に変えている。当事者研究による情報公開は浦河べてるの家のみならず、全国の当事者たちに影響を与え、相手の情報公開によって自身に新たな発見を与える。浦河ではミーティングは3度の飯より重要なのである。



目的

本研究では、当事者による語りを回復への重要なテーマと位置づけてきた“浦河べてるの家”の当事者研究を対象に、Text Mining Studioを用いて当事者の物語の記述を分析することを目的とする。

方法

- 対象: べてるねっとー統合失調症等の精神障害者の活動拠点「べてるの家」の情報サイトー内のコンテンツ「知る」において連載中(2008/10/31現在)である「当事者研究の部屋」
- WEBサイトデータ取得日時: 2008年10月2日取得
- URL: <http://bethel-net.jp/index.html>
- 範囲: 当事者研究の部屋vol.001～018までの16項目
- 全18項目のうち、前編・後編にわたる同一人物の記述は1つの項目としてカウントした(対象: vol.004 & 005, vol.006 & 007)

分析対象情報： べてるねっとー統合失調症等の精神障害者の活動拠点 「べてるの家」の情報サイトー

www.bethel-net.jp

ようこそ、べてるの家の情報サイト「べてるねっと」へ

分析対象コンテンツ

知 買う 仲間 行こう!

お問い合わせ

・べてるの家とは
・サイトマップ

Google カスタム検索 検索

べてるねっと SNS
Bethel-net SNS

ベテラジ

イベント情報

べてるセミナー in 横浜 「大相談会」

10月19日横浜市の鶴見会館で、その道の“専門家”を集めた「大相談会」と題してべてるセミナーが行なわれました。

浦河からは、向谷地生良さん、早坂潔さん、松本寛さん(具合が悪く「引退宣言」をして朝に帰りました)、吉野雅子さん、吉田めぐみさんが参加しました。続きを読む

分析対象:「当事者研究の部屋」



www.bethel-net.jp

知る

買う

仲間

行こう!

お問い合わせ

What's New

・幻聴を人工的会話法で止める

Book Number

- ・「直感認知行動療法」
「ゲームパニック症の完治」
- ・自分の面影を見る研究
- ・操作軸の研究
- ・意の自分を変えたいなら4つのキー
- ・自分の考え方の研究—看護の書き替え
- ・本当の自分の気持ちの研究
- ・生活音の研究
- ・自分の聴く方の研究
- ・「言時」の研究
- ・顔・舌の飲み心地の研究
- ・声の飲み心地の研究
- ・顔・口唇の研究
- ・口唇の研究—本田野夫
- ・過剰反応する件と透明な自分
- ・カッパの法則
- ・本当の「認知行動療法」?



分析対象



当事者研究 の 部屋



・当事者研究ワークシートはこちら(PDFファイル)



PDFファイルをご覧いただくためには、Adobe® Reader® が必要です。アドビ社のサイトより無料でダウンロード可能です。

分析手順

- 「当事者研究の部屋vol.1～18」をテキストファイル化し、Microsoft Office Excel 2003にて読み込ませ、Text Mining Studio 3.0用にCSV(カンマ区切り)データを作成した。
- 分かち書き処理の前段階として文中の記号や特殊記号を外し、「分かち書きと係り受けと自動連結」を実行した。その際に、オプションとして「類義語自動抽出」と「見出し語が同じ場合、出現頻度の高い品詞へ統合」を選択。その後、分かち書き結果に伴い、ユーザー辞書または類義語辞書を編集し、品詞を整えた上で再度分かち書きを実行した。

結果

全体分析: 基本情報

「当事者研究の部屋」基本情報

項目	値
総行数	16
平均行長(文字数)	871.6
総文数	861
平均文長(文字数)	16.2
述べ単語数	5075
単語種別数	1926

品詞詳細別頻出回数		上位10項目
品詞	品詞詳細	出現回数
名詞	一般	1776
動詞	自立	1042
名詞	サ変接続	798
名詞	代名詞	185
名詞	副詞可能	175
名詞	形容動詞語幹	174
形容詞	自立	157
名詞	固有名詞人名	138
名詞	数	87
名詞	固有名詞地名	66

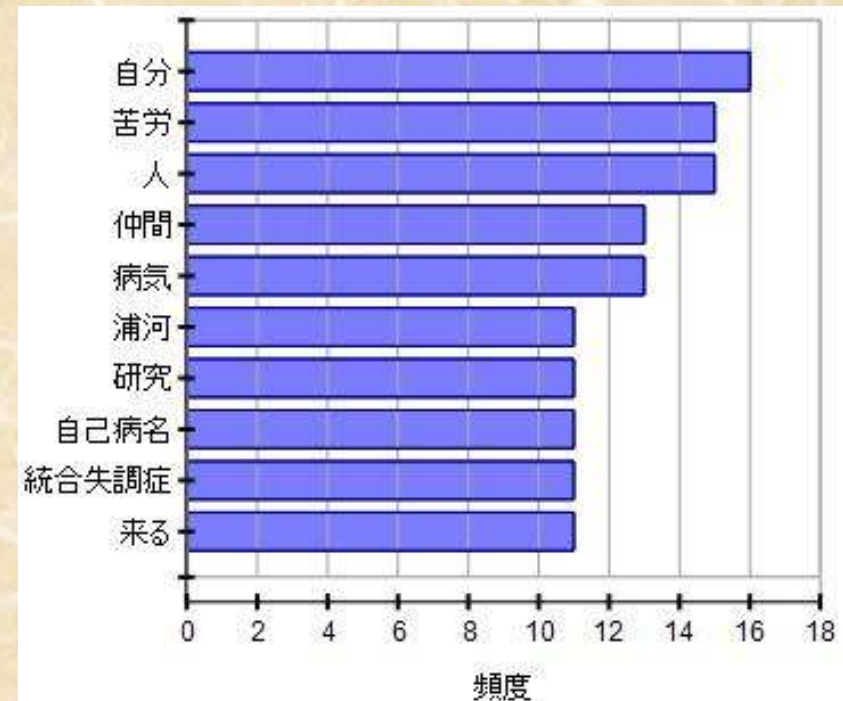
総行数とは、今回の分析範囲が全16項目のテキストから成り立っていることを表している。今回の分析結果では、基本情報として総文数は861(文数)であり、平均行数は871.6(行)、平均文長は16.2(文字数)であったことがわかる。

テキスト全体における述べ単語数は5075(個数)であり、各品詞詳細別頻出回数は一般名詞が最多の1776(回数)であり、次いで自立動詞が1042(回数)、サ変接続名詞が798(回数)であった。

全体分析：単語頻度解析

「当事者研究の部屋」単語頻度表

順位	単語	品詞	頻度
1	自分	名詞	16
2	苦勞	名詞	15
2	人	名詞	15
3	仲間	名詞	13
3	病氣	名詞	13
6	浦河	名詞	11
6	研究	名詞	11
6	自己病名	名詞	11
6	統合失調症	名詞	11
6	来る	動詞	11



「当事者研究の部屋」単語頻度図

次に、全16項目における単語頻度解析で得られた単語頻度回数のうち、上位10単語を
図表にてあらわす。

今回の分析において最も頻度が高く出現した単語は「自分」であり、次点に「苦勞」「人」、
さらに「仲間」「病氣」と単語頻度が出現することが分かった。

全体分析:属性別単語頻度解析

「当事者研究の部屋」属性別頻出単語表

単語\属性	no.01	no.02	no.03	no.04	no.05	no.06	no.07	no.08	no.09	no.10	no.11	no.12	no.13	no.14	no.15	no.16
自分	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
苦勞	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1
人	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
仲間	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0
病氣	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	0
浦河	1	1	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0	0
研究	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	1	0
自己病名	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0
統合失調症	1	0	1	0	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	0
来る	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0

「当事者研究の部屋」全16項目、各属性から全体分析で上位に挙げた頻出単語を個別に見ていくと、最頻出単語であった「自分」については、すべての属性において文中に単語として表れ、記述されていることがわかる。つまり、「当事者研究の部屋」は自分というキーワードを用いた自身についての表現であることが属性別単語頻度解析表から読み取れる。

頻出単語上位10項目すべて用いて語っていたのは(no.01, no.07, no.08, no.09, no.11, no.12)であった。

属性別単語頻度解析からは、どの属性も同じような単語を用いて語られているとわかる。

全体分析:係り受け頻度解析(1)

「当事者研究の部屋」 係り受け(行動抽出)頻度表

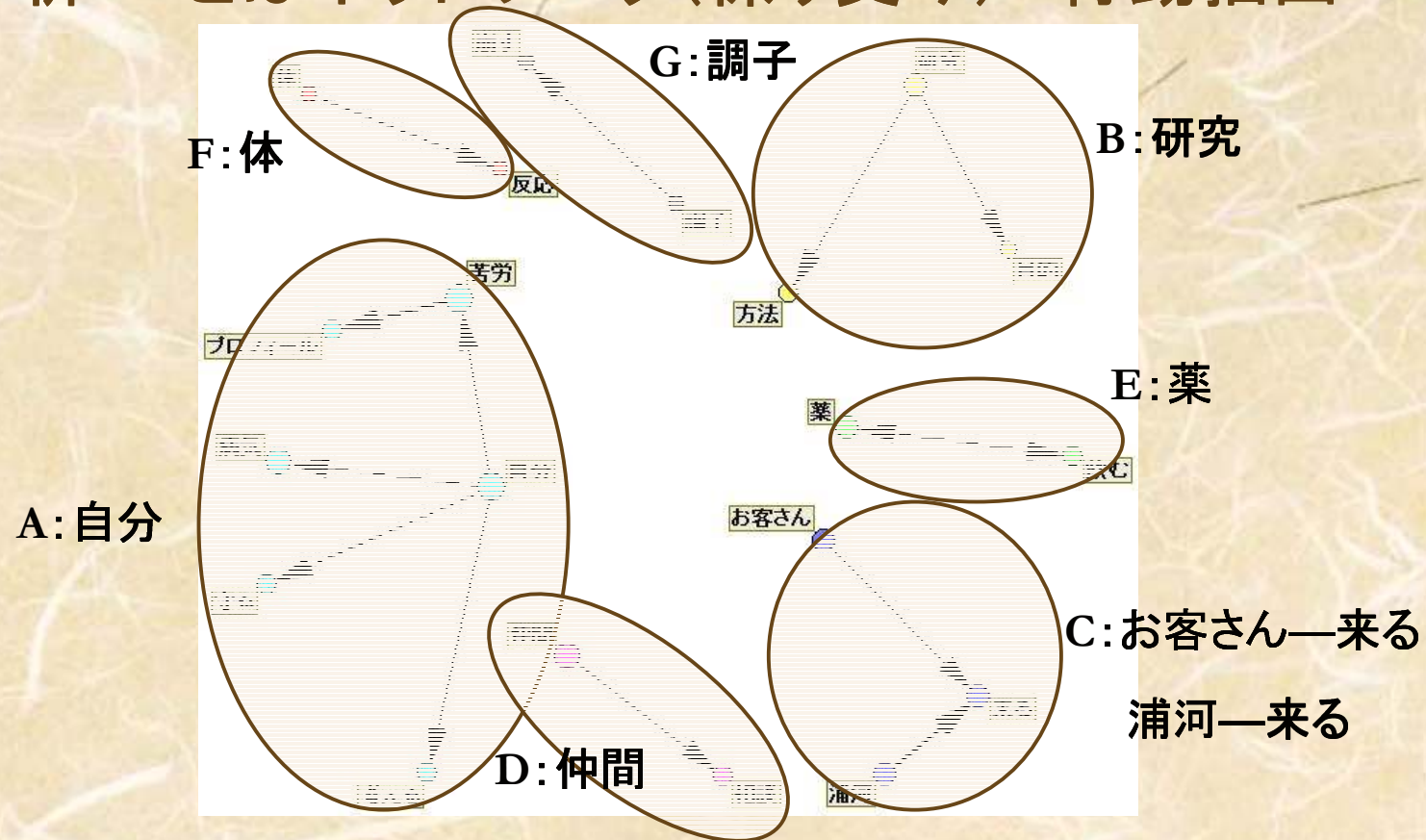
係り元単語	係り元品詞	係り先単語	係り先品詞	頻度
浦河	名詞	来る	動詞	8
お客さん	名詞	来る	動詞	5
自分	名詞	考える	動詞	4
仲間	名詞	相談	名詞	4
薬	名詞	飲む	動詞	4
自分	名詞	苦労	名詞	3
自分	名詞	守る	動詞	3
自分	名詞	病気	名詞	3
体	名詞	反応	名詞	3
調子	名詞	崩す	動詞	3
アドバイス	名詞	もらう	動詞	2
アドバイス	名詞	受ける	動詞	2
お客さん	名詞	くる	動詞	2
サイン	名詞	開発	名詞	2
サトラレ	名詞	苦労	名詞	2
スイッチ	名詞	入る	動詞	2
ミュンヒハウズ	名詞	代理	名詞	2
栄養	名詞	もらう	動詞	2
外	名詞	歩く	動詞	2
関係	名詞	悪化	名詞	2



全体分析:係り受け頻度解析(2)

- 係り受け頻度解析(1)は、品詞フィルタ(行動)による全16項目の係り受け頻度解析の結果である。係り受け頻度解析(1)の結果によれば、全16項目において、最も頻度の高い係り受けは「浦河一来る」の8(頻度)であった。
- しかしながら、属性別単語頻度解析において「当事者研究の部屋」全16項目が、それぞれ共通の単語を用いて記述されていたと思われていたが、係り受け頻度解析の結果、係り受け頻度における共通点が少なかったことが属性別単語頻度解析と係り受け頻度解析によって分かった。

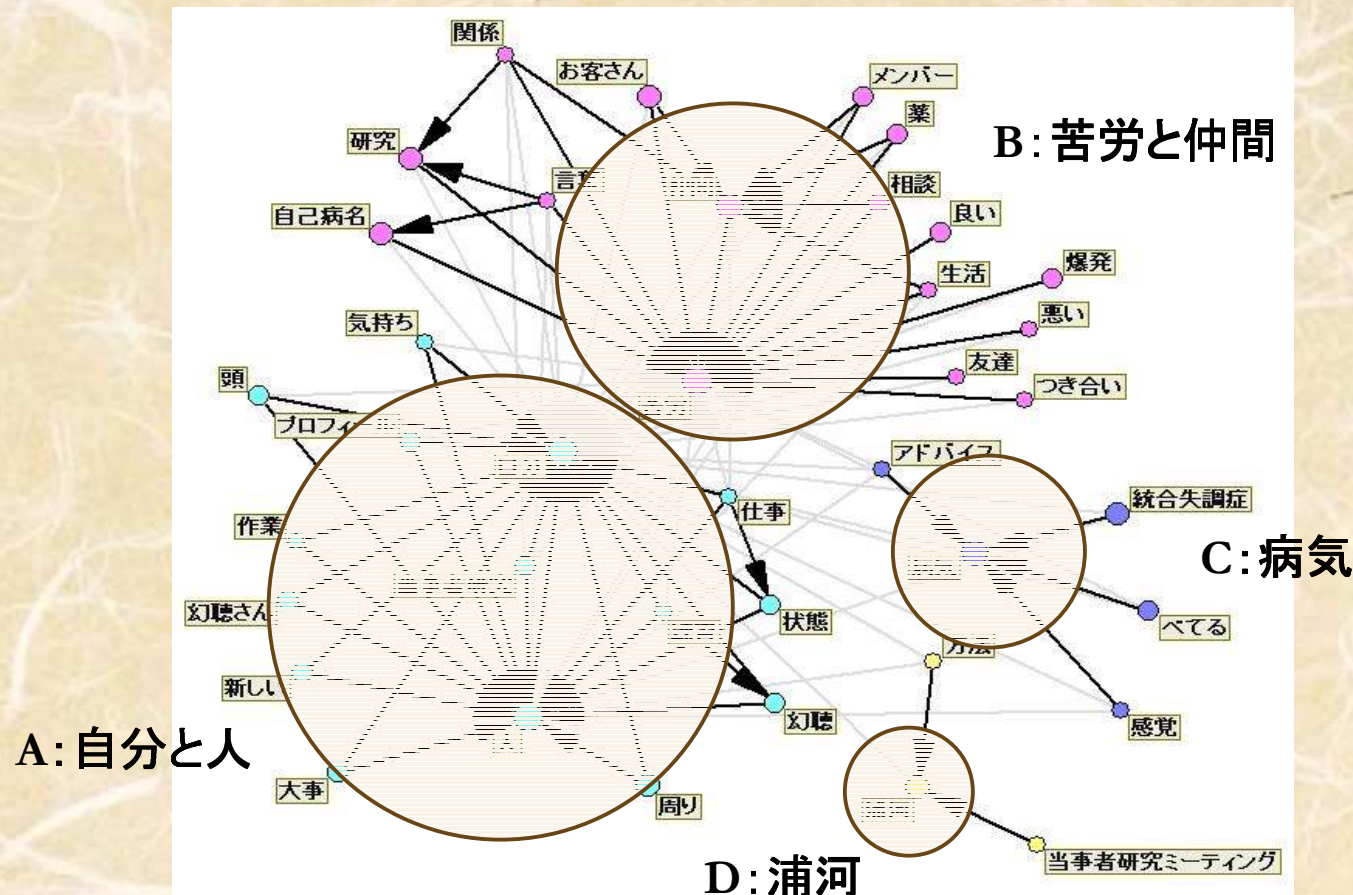
全体分析:ことばネットワーク(係り受け) 行動抽出



属性別単語頻度解析と係り受け頻度解析をふまえて「当事者研究の部屋」における文章の構造を係り受け関係から見る。全体分析・基本情報による品詞頻出回数から、頻度上位10件を係り受け頻度2回以上で行動抽出を行った。

出力された結果に基づき、文章の構造をAからGまでのグループに分け、それぞれのカテゴリー名を設定した。文章構造は7つのグループに分かれていることが分かった。

全体分析:ことばネットワーク(共起関係) イメージ抽出



次に、同じく「当事者研究の部屋」全16項目における行単位ごとのつながりをことばネットワーク(共起関係)から見る。抽出品詞設定をイメージとし、抽出単位を行単位とした。指標として2回以上出現、最低信頼度数80として分析を実行した。

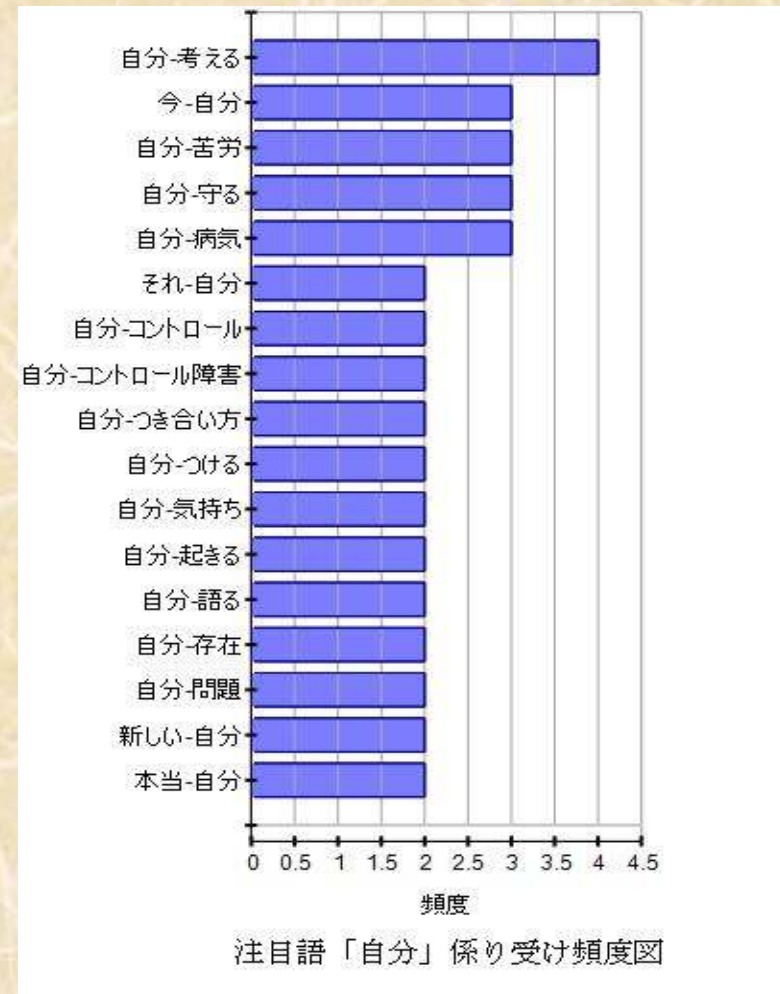
分析の結果、クラスタ数設定4の場合に4つのグループに分かれることがわかった。4つのグループには、AからDまでそれぞれのグループに対して「自分と人」、「苦勞と仲間」、「病気」、「浦河」とカテゴリー名をつけた。

全体分析:注目語情報分析「自分」(1)

単語頻度分析において、最頻出単語として挙げられている「自分」に着目し、その注目語情報分析から係り受け関係を見る。

注目語「自分」係り受け頻度表

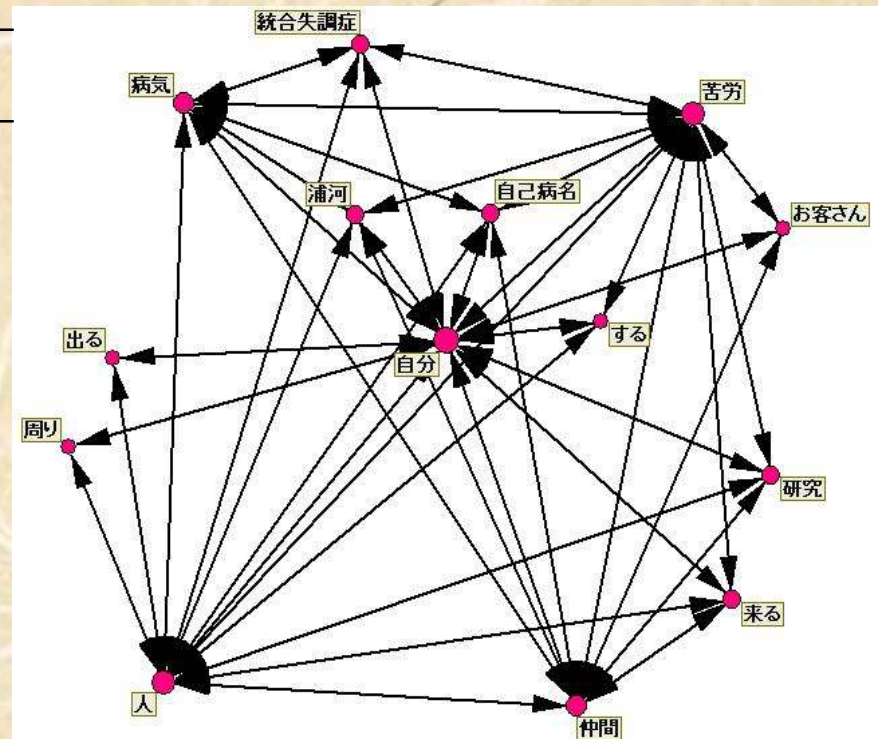
係り元単語	係り元品詞	係り先単語	係り先品詞	頻度
自分	名詞	考える	動詞	4
今	名詞	自分	名詞	3
自分	名詞	苦勞	名詞	3
自分	名詞	守る	動詞	3
自分	名詞	病氣	名詞	3
それ	名詞	自分	名詞	2
自分	名詞	コントロール	名詞	2
自分	名詞	コントロール障害	名詞	2
自分	名詞	つき合い方	名詞	2
自分	名詞	つける	動詞	2
自分	名詞	気持ち	名詞	2
自分	名詞	起きる	動詞	2
自分	名詞	語る	動詞	2
自分	名詞	存在	名詞	2
自分	名詞	問題	名詞	2
新しい	形容詞	自分	名詞	2
本当	名詞	自分	名詞	2



全体分析:注目語情報分析「自分」(2)

注目語分析「自分」 共起情報上位ルール群

前提単語	前提品詞	結論単語	結論品詞	信頼度	サポート	ルール数
苦勞	名詞	自分	名詞	100	93.75	15
人	名詞	自分	名詞	100	93.75	15
仲間	名詞	苦勞	名詞	100	81.25	13
仲間	名詞	自分	名詞	100	81.25	13
病氣	名詞	自分	名詞	100	81.25	13
自分	名詞	苦勞	名詞	93.75	93.75	15
自分	名詞	人	名詞	93.75	93.75	15
苦勞	名詞	人	名詞	93.33	87.5	14
人	名詞	苦勞	名詞	93.33	87.5	14
苦勞	名詞	仲間	名詞	86.66	81.25	13
自分	名詞	仲間	名詞	81.25	81.25	13
自分	名詞	病氣	名詞	81.25	81.25	13



注目語「自分」共起単語ネットワーク図

注目語情報分析の結果、「自分」における係り受け頻度において最も頻度が高かったのは、「自分ー考える」の頻度4であった。次いで頻度3である「今ー自分」、「自分ー苦勞」、「自分ー守る」、「自分ー病氣」と係り受け頻度が表れていることがわかる。

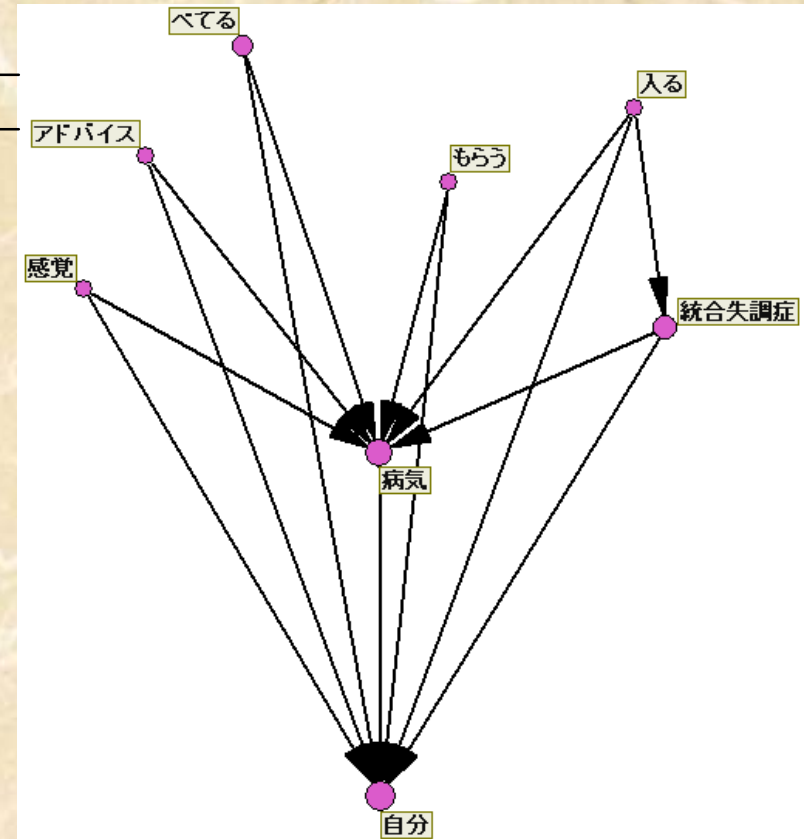
さらに、注目語「自分」について行単位抽出、10回以上の出現で共起単語ネットワーク図とルール数上位10位までの共起情報を作成した(最低信頼度60)。共起情報上位ルール群によれば、結論単語である「自分」に「苦勞」と「人」の前提単語によって、それぞれ15のルール数が表れたことがわかった。

全体分析:注目語情報分析「病気」(1)

浦河べてるの家に住む当事者たちは、自身の持つ「病気」についてどのように語っているのだろうか。注目語情報分析を行った。

注目語分析「病気」 共起情報

前提単語	前提品詞	結論単語	結論品詞	信頼度	サポート	ルール数
病気	名詞	自分	名詞	100	81.25	13
統合失調症	名詞	自分	名詞	100	68.75	11
統合失調症	名詞	病気	名詞	100	68.75	11
べてる	名詞	自分	名詞	100	50	8
べてる	名詞	病気	名詞	100	50	8
もらう	動詞	自分	名詞	100	37.5	6
もらう	動詞	病気	名詞	100	37.5	6
アドバイス	名詞	自分	名詞	100	37.5	6
アドバイス	名詞	病気	名詞	100	37.5	6
感覚	名詞	自分	名詞	100	37.5	6
感覚	名詞	病気	名詞	100	37.5	6
入る	動詞	自分	名詞	100	37.5	6
入る	動詞	統合失調症	名詞	100	37.5	6
入る	動詞	病気	名詞	100	37.5	6



注目語「病気」共起単語ネットワーク図

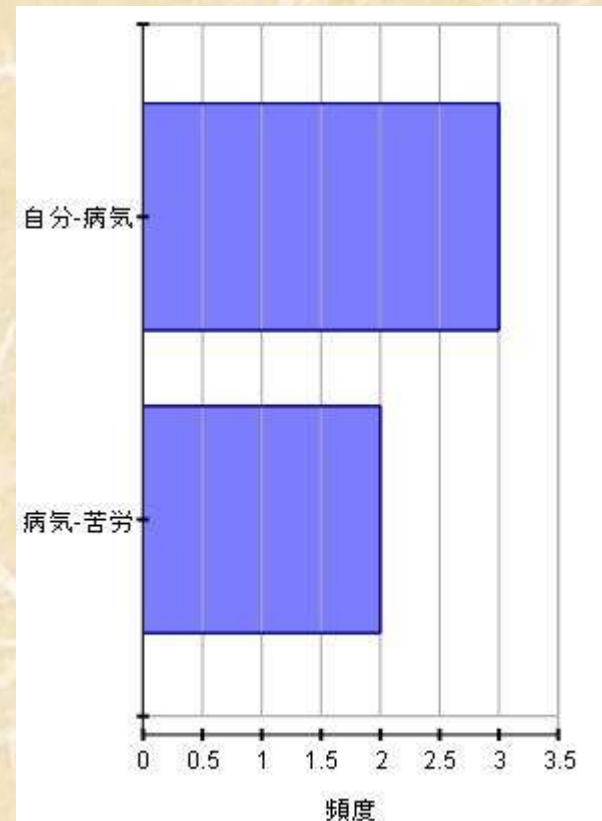
注目語情報分析「病気」の結果、「病気」における共起単語ネットワークについて最も多くのルール数が表れたのは、前提単語「病気」から結論単語「自分」への13のルールであった。前提単語「統合失調症」においても、結論単語「自分」「病気」へそれぞれ11のルールが表れたことが共起情報によりわかる。

さらに、共起情報によれば、「病気」と共に「自分」が結論単語として多く表れており、共起単語ネットワーク図からもそれが読み取れる。

全体分析:注目語情報分析「病氣」(2)

注目語分析「病氣」 単語頻度表

単語	品詞	頻度
自分	名詞	16
病氣	名詞	13
統合失調症	名詞	11
べてる	名詞	8
もらう	動詞	6
アドバイス	名詞	6
感覚	名詞	6
入る	動詞	6



注目語「病氣」係り受け頻度図

注目語情報分析「病氣」における係り受け頻度では、「自分-病氣」が3頻度であったが、ほかに注目語表現として「病氣-苦労」が2頻度表れていることがわかる。

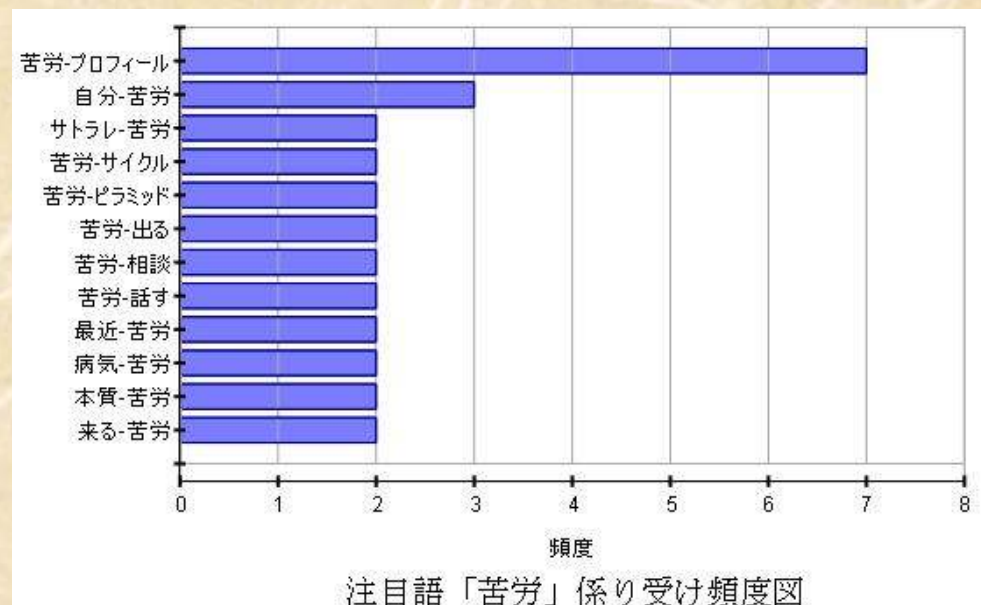
注目語分析「病氣」単語頻度においては「自分」が16頻度と最多であり、続いて「病氣」の13頻度、「統合失調症」の11頻度と単語が表れていることがわかる。注目語分析「病氣」による単語頻度上位を占めたのは、自分と病氣(統合失調症)に関するものであった。

全体分析：注目語情報分析「苦勞」(1)

「問題」と同じく、浦河べてるの家において重要なキーワードとされる「苦勞」について当事者たちはどのように語っているだろうか、注目語情報分析を行った。

注目語「苦勞」係り受け頻度表

係り元単語	係り元品詞	係り先単語	係り先品詞	頻度
苦勞	名詞	プロフィール	名詞	7
自分	名詞	苦勞	名詞	3
サトラレ	名詞	苦勞	名詞	2
苦勞	名詞	サイクル	名詞	2
苦勞	名詞	ピラミッド	名詞	2
苦勞	名詞	出る	動詞	2
苦勞	名詞	相談	名詞	2
苦勞	名詞	話す	動詞	2
最近	名詞	苦勞	名詞	2
病気	名詞	苦勞	名詞	2
本質	名詞	苦勞	名詞	2
来る	動詞	苦勞	名詞	2



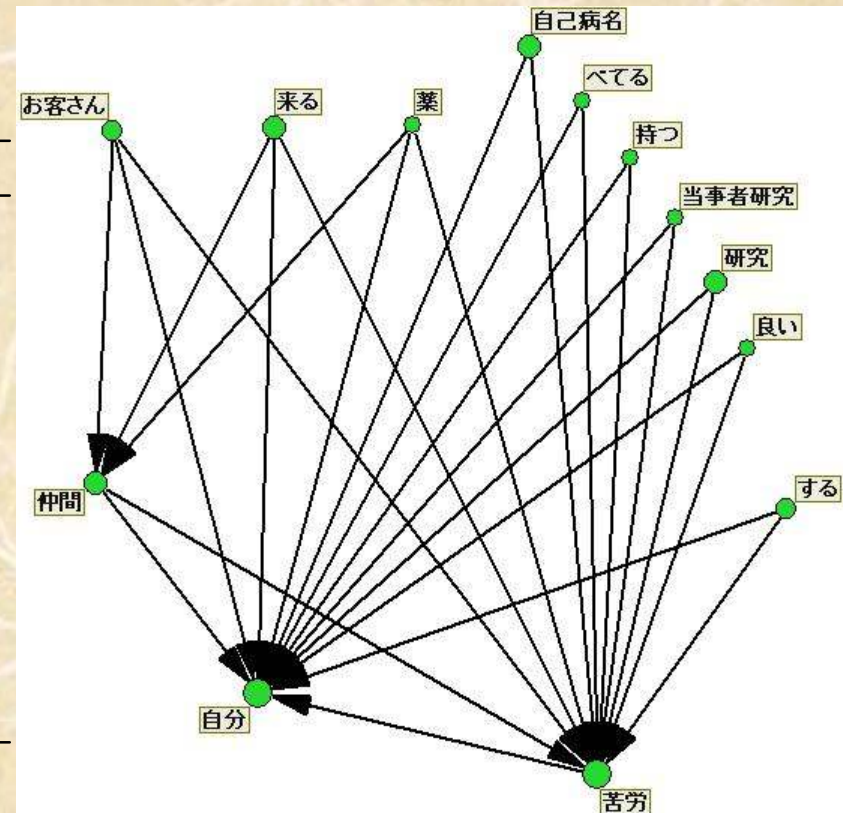
注目語分析の結果、係り受け頻度表によれば「苦勞ープロフィール」がもっとも高く、7頻度で表れていることがわかった。次いで「自分ー苦勞」の3頻度が表れており、いずれも「自分」を中心とした注目語表現として表されていることがわかる。

係り受け頻度は2であるが、「自分」に関する「苦勞」の注目語表現のほかに、「苦勞ー話す」「苦勞ー相談」といった他者へ向けた「苦勞」に関する注目語表現も同時に表れていることがわかる。

全体分析:注目語情報分析「苦勞」(2)

注目語分析「苦勞」 共起情報上位ルール群

前提単語	前提品詞	結論単語	結論品詞	信頼度	サポート	ルール数
苦勞	名詞	自分	名詞	100	93	15
仲間	名詞	苦勞	名詞	100	81.25	13
仲間	名詞	自分	名詞	100	81.25	13
研究	名詞	苦勞	名詞	100	68.75	11
研究	名詞	自分	名詞	100	68.75	11
自己病名	名詞	苦勞	名詞	100	68.75	11
自己病名	名詞	自分	名詞	100	68.75	11
来る	動詞	苦勞	名詞	100	68.75	11
来る	動詞	自分	名詞	100	68.75	11
来る	動詞	仲間	名詞	100	68.75	11



注目語「苦勞」共起単語ネットワーク図

さらに、注目語「苦勞」を対象に8回以上出現、行単位において共起単語ネットワークと共起ルール数上位10位までの共起情報を作成した(最低信頼度数100)。

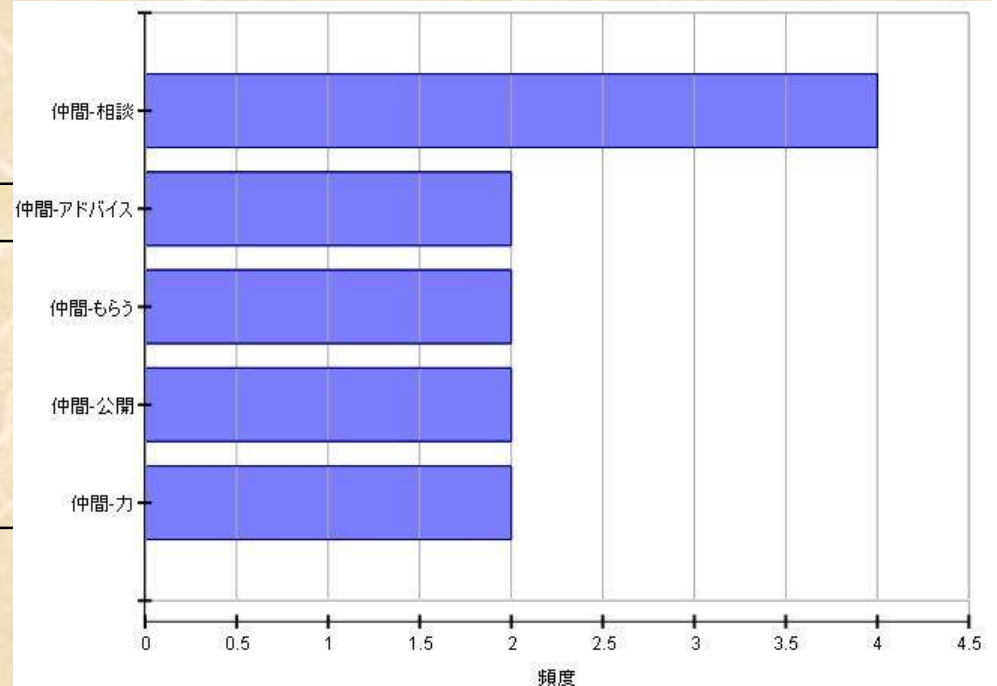
共起情報によれば、もっとも多くのルール数が表れたのは前述単語「苦勞」から結論単語「自分」への15ルールであった。さらに、前述単語「仲間」から結論単語「苦勞」「自分」へそれぞれ13のルール数が表れていることがわかる。

全体分析:注目語情報分析「仲間」(1)

浦河べてるの家を支えるキーワードである「仲間」を注目語とし、当事者たちはどのように仲間を捉えているのか注目語分析を行った。

注目語「仲間」係り受け頻度表

係り元単語	係り元品詞	係り先単語	係り先品詞	頻度
仲間	名詞	相談	名詞	4
仲間	名詞	アドバイス	名詞	2
仲間	名詞	もらう	動詞	2
仲間	名詞	公開	名詞	2
仲間	名詞	力	名詞	2



注目語「仲間」係り受け頻度図

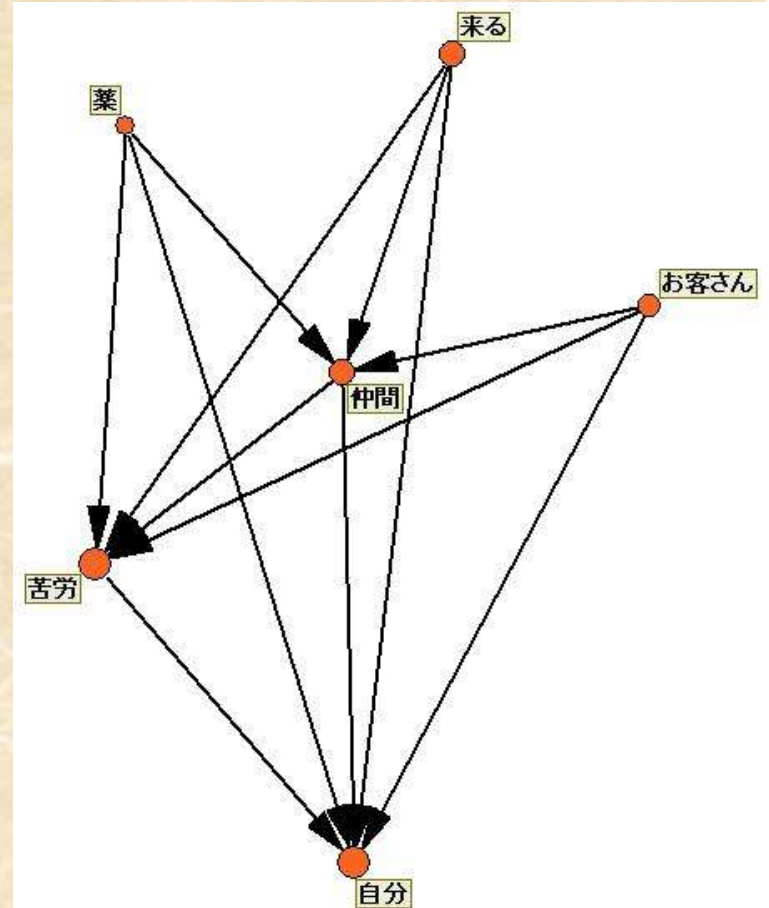
注目語分析の結果、係り受け頻度においてもっとも高い頻度で表れたのは「仲間－相談」の4頻度であり、続いて「仲間－アドバイス」「仲間－もらう」「仲間－公開」「仲間－力」の2頻度であったことがわかる。

「仲間－相談」の注目語表現が最多の頻度で表れた点は、浦河べてるの家における仲間のあり方を示し、「仲間－アドバイス」「仲間－力」など、浦河べてるの家における仲間の果たす役割を表している。

全体分析:注目語情報分析「仲間」(2)

注目語分析「仲間」 共起情報上位ルール群

前提単語	前提品詞	結論単語	結論品詞	信頼度	サポート	ルール数
苦勞	名詞	自分	名詞	100	93.75	15
仲間	名詞	苦勞	名詞	100	81.25	13
仲間	名詞	自分	名詞	100	81.25	13
来る	動詞	苦勞	名詞	100	68.75	11
来る	動詞	自分	名詞	100	68.75	11
来る	動詞	仲間	名詞	100	68.75	11
お客さん	名詞	苦勞	名詞	100	62.5	10
お客さん	名詞	自分	名詞	100	62.5	10
お客さん	名詞	仲間	名詞	100	62.5	10
薬	名詞	苦勞	名詞	100	50	8



注目語「仲間」共起単語ネットワーク図

次に、注目語「仲間」を対象に行単位、8回以上出現で共起単語ネットワーク図と共起ルール数上位10位までの共起情報を作成した(最低信頼度数100)。

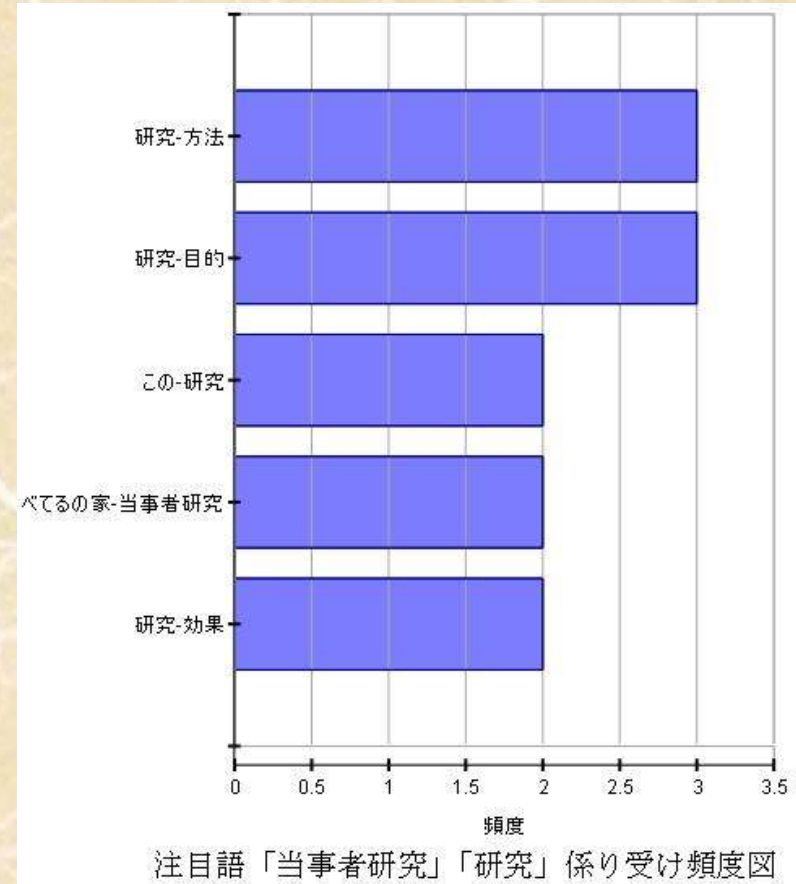
共起情報によれば、もっとも多く表れたのは前提単語「苦勞」から結論単語「自分」への15のルール数であった。注目語「仲間」については、結論単語「苦勞」「自分」へ13のルール数で表れたことがわかる。前提単語「仲間」から結論単語「自分」への共起は、当事者たちのつながりを表していることが読み取れる。

全体分析:注目語情報分析「当事者研究」「研究」(1)

全体分析の単語頻度解析上位単語には当てはまらなかったが、浦河べてるの家において独自に用いられている言葉である「当事者研究」とそれと同じ意味を指す「研究」を対象に、どのように語られているのか注目語分析を行う。

注目語「当事者研究」「研究」係り受け頻度表

係り元単語	係り元品詞	係り先単語	係り先品詞	頻度
研究	名詞	方法	名詞	3
研究	名詞	目的	名詞	3
この	連体詞	研究	名詞	2
べてるの家	名詞	当事者研究	名詞	2
研究	名詞	効果	名詞	2



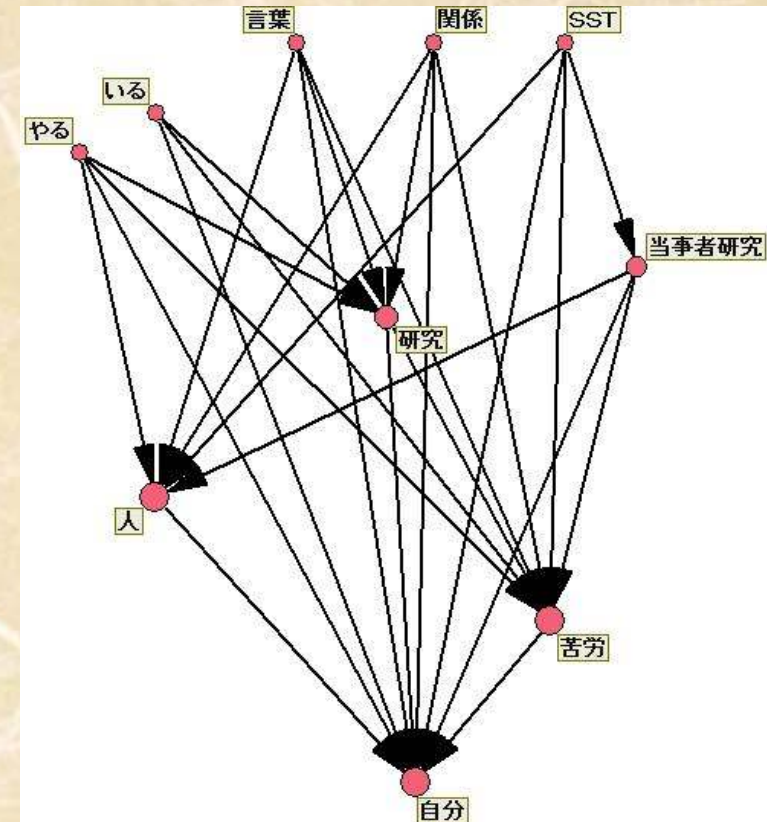
注目語分析の結果、係り受け頻度においては「研究」から「方法」「目的」へそれぞれ3頻度にて注目語表現が表されていることがわかる。さらに、「研究-効果」が2頻度の注目語表現として表れた。当事者たちは研究の方法や目的を模索していることが読み取れる。

注目語「当事者研究」については、「べてるの家-当事者研究」のみ係り受け関係として構築されており、2頻度で表れていることがわかる。

全体分析:注目語情報分析「当事者研究」「研究」(2)

注目語分析「当事者研究」「研究」 共起情報上位ルール群

前提単語	前提品詞	結論単語	結論品詞	信頼度	サポート	ルール数
苦勞	名詞	自分	名詞	100	93.75	15
人	名詞	自分	名詞	100	93.75	15
研究	名詞	苦勞	名詞	100	68.75	11
研究	名詞	自分	名詞	100	68.75	11
当事者研究	名詞	苦勞	名詞	100	56.25	9
当事者研究	名詞	自分	名詞	100	56.25	9
当事者研究	名詞	人	名詞	100	56.25	9
SST	名詞	苦勞	名詞	100	31.25	5
SST	名詞	自分	名詞	100	31.25	5
SST	名詞	人	名詞	100	31.25	5



注目語「当事者研究」「研究」共起単語ネットワーク図

次に、注目語「当事者研究」「研究」について行単位、5回以上にて共起単語ネットワークと共起ルール数上位10位までの共起情報を作成した(最低信頼度数100)。

共起情報によれば、もっとも多くのルール数が表れたのは注目語ではなく、前提単語「苦勞」「人」から結論単語「自分」への15ルール数であった。注目語については、「研究」から「苦勞」「自分」へ11のルール数が表れたことがわかる。

また、共起単語ネットワーク図によれば「言葉」「SST」「関係」などが、「当事者研究」や「研究」を介して「自分」や「苦勞」へとネットワークを構築していることがわかる。つまり「当事者研究」は、「言葉」や「SST」または「関係」を「自分」や「苦勞」へと繋げていく関係であるとわかる。

考察1 結果の要約

- 分析対象であった浦河べてるの家「当事者研究の部屋」全16項目においては、単語頻度解析および属性別単語頻度解析により、16人それぞれの当事者研究の記述が「自分」という共通の単語を使用していることが明らかになった。しかし、係り受け頻度解析の結果によって、それぞれが「自分」という単語を使用するなかで、その中身については自分自身の、当事者それぞれの物語を独自に構築していることがText Mining Studioによって明らかにされた。
- 浦河べてるの家の当事者たちによる物語は、「自分」という共通した言葉を使用しながらも、それぞれが万華鏡のようにさまざまな言葉の形やネットワークによって、独自の物語を私たちにを見せてくれる
- 浦河べてるの家において掲げられている理念や回復への取り組みは、ことばネットワーク(共起関係・イメージ抽出)によって特徴的に表された。ことばネットワーク(共起関係・行動抽出)も同様に浦河べてるの家の当事者たちの姿を特徴的に表している。
- 浦河べてるの家の独自の取り組みである「考える」ことへの回復は、注目語情報「自分」における係り受け頻度結果において示された。さらに、「考える」ことへの回復は、注目語情報分析「苦労」の結果においてもその効果が表れているといえる。苦労のプロフィールは、自分自身について考えられたからこそ、初めて言葉として語る事が可能なのである。「考える」ことは、現在の自分に存在する苦労や問題を明らかにするだけでなく、それらについて仲間と相談、またはミーティングをすることにより、自身の新たなる発見や仲間からのアドバイスによって力をもらおうといった、浦河べてるの家における「仲間」のあり方が分析によって描かれている。

考察2 当事者研究の意義

- 当事者の「言葉」を取り戻す上で、浦河べてるの家の最大の特徴である「当事者研究」は、当事者と言葉をつなげていく大きな役割を果たしている。注目語情報分析により、「言葉」や「関係」を「当事者研究」を通じて「自分」へとつなげていく、両者の橋渡しを担う役割を果たしていることが描かれている。当事者研究が研究と表されるように、それは自分自身を取り戻すための研究である。しかし、研究であるからこそ、必ずしも成功を収めるとは限らず、失敗もある。だが、浦河べてるの家には「失敗しても、研究すればいい。練習すればいい。」という言葉がある。1度きりではない、何度でもやり直すことのできる「研究」という言葉は、当事者たちに自分自身に立ち向かっていく勇気を与えている。数々の苦労や問題を乗り越え、当事者たちは自分自身を取り戻す研究を日々続けている。
- 浦河べてるの家の回復の構造である、自分自身の苦労を取り戻す「当事者研究」をサポートしている1人が、浦河べてるの家のSW(ソーシャルワーカー)を務める向谷地生良氏である。向谷地(2007)によれば、当事者を一方的に支配したり、保護・管理することは、人間誰しもがかかえながら生きている“苦労という経験”を奪い去ることを意味する。幻覚や妄想も、日常的な暮らしの心配も、そして、「生きることの意味」というシンプルで深遠な人生課題も、すべては一人の人間にとってはかけがえのない経験であり「宝物」なのである。それは、いまもむかしも精神医療の世界にもっとも欠落した部分であり、浦河での30年間の歩みのなかで、私たちがいちばん大切にしてきたものである。
- このような当事者の“苦労”を“仲間”とともに研究する当事者研究は、当事者の人生の回復にとって大きな意義を持つ。
- 本研究では、そのような「苦労」や「仲間」の重要性を「当事者研究の部屋」WEBサイトの記述を対象にすることにより、先行研究による質的な分析に加え、今回新たに量的にも明らかにすることが出来た。

考察3 テキストマイニングの手法

- テキストマイニングにより、当事者たちによって共通して語られているキーワードや話題の頻度を量的に示すことができる。さらに、質的研究の分野である当事者の語りを原文参照機能により分析を行うことで、質的研究法を加えたミックス法において明らかにすることができるテキストマイニングの手法のもつ意味は大きい。
- 本研究では、浦河べてるの家において当事者主体である回復へのさまざまな取り組みによる構造や、同じ問題や苦労を抱える仲間と相談し、それを力とする浦河べてるの家の姿をText Mining Studioによって1つの形として描くことができた。
- Text Mining Studioは当事者の物語の分析において有効なツールであり、支援者の立場からの精神医療従事者の取り組みにとっても、当事者の回復を考える際に大きな役割を果たすだろう。

考察4 本研究の限界と今後の展望

- 本研究は、全体分析においては一定の結果を示すことができたものの、「当事者研究の部屋」の文章はそれほど長くはない。基本情報による各項目の情報量が小さいことにより、それぞれの当事者自身に焦点を絞った分析を十分に行うことができなかった点が本研究の限界であるといえる。とはいえ、当事者の語りをテキストマイニングの手法により量的に明らかにした初めての研究であるという画期的意義を本研究は持つであろう。
- 当事者による語りは本研究の分析対象であるようなWEB情報だけでなく、さまざまな病気や障がいについての“闘病記”として出版された文献が存在する。今回分析対象としたものは本人の肉声の記録ではなく、WEBサイト用に加工された物語であるという限界もある。本研究をふまえた上で、十分な情報量をもつ闘病記を分析することにより、当事者主体の精神医療へ向けた新たな発見をテキストマイニングは導きだすであろう。

参考文献

- 伊藤絵美・向谷地生良 2007 認知療法べてる式 医学書院
- 伊藤順一郎 2005 統合失調症:正しい理解と治療法 講談社
- 大熊輝雄 2008 現代臨床精神医学 改訂第11版 金原出版
- 小平朋江・伊藤武彦 2006 精神障害者の偏見と差別とスティグマの克服
マクロ・カウンセリング研究, 5, 62-73.
- 小平朋江・伊藤武彦・松上伸丈・佐々木 彩 2007 テキストマイニングによるビデオ教材の分析:精神障害者への偏見低減教育のアカウンタビリティ向上をめざして マクロ・カウンセリング研究, 6, 16-31.
- 向谷地生良 2006 「べてるの家」から吹く風 いのちのことば社
- 向谷地生良・浦河べてるの家 2006 安心して絶望できる人生 日本放送出版協会
- 向谷地生良 2007 技法=以前3当事者と専門家 精神看護 Vol.10 No.4 p89-95 医学書院
- 向谷地生良 2008 べてるな人びと 第1集 一麦出版社